第 94 回国医節、第 16 回台北国際中医薬学術論壇レポート

日本中医薬学会 国際交流委員会、中国天龍堂中医クリニック
崔 衣林

2024 年 3 月 16 日、17 日に、第 94 回国医節、第 16 回台北国際中医薬学術フォーラムが台北にて開催された。コロナのため 2019 年以降参加できなかったが、4 年ぶりに参加した。フォーラムは、参加費を支払い聴講できる国際フォーラムと、別途追加料金を支払い、より深い内容を聴講できる特別講演があり、国際フォーラムは 66 題、特別講演 8 題と非常に豊富な内容が準備された。

今回の国際フォーラム 66 題中、台湾 50 題、中国大陸 8 題、マレーシア 3 題、日本 2 題、韓国 1 題、アメリカ 1 題、フランス 1 題と各国の専門家による発表が行われた。テーマ別に見ると、経方特別講演 6 題、大会特別講演 10 題、針内科医学臨床応用研討会 11 題、台湾経方大師張歩桃教授記念研討会 8 題、中医薬臨床研究研討会 16 題、健康法規研習 7 題、伝統医学と AI ビックデータの結合の応用と研究 8 題となり、経方をメインとし、針による内科治療を普及させ、AI を活用していきたいと、主催者の方針がわかる。

内容としては、湯液 33 題、鍼灸 14 題、調査報告 6 題、中医診断 6 題、健康法規に関する内容 3 題、湯液と鍼灸の併用 2 題、推拿 1 題、古典研究 1 題となり、湯液が多い傾向だ。湯液 33 題のうち、特に傷寒論や経方の内容が目立ち、テーマにある経方特別講演や台湾経方大師張歩桃教授記念研討会を見ても、台湾の中医薬は経方が主流で、特に張歩桃教授の学術思想を中心とした経方医学が確立されている。

台湾著名傷寒学家―張歩桃教授は 1941 年中国台湾花蓮県にて中医家系に生まれ、幼少期から父より中医学を学ばれ、臨床経験 50 年以上あり、多くの難病を治療された。また、《傷寒論》《金匱要略》を 30 年以上研究され、《傷寒論》は 5000 回以上朗読された。SARS の時には真っ先に中医療法を導入すべきと提唱し、多くの命を救った。張歩桃教授は、張仲景の学術思想を重視し、中医薬は簡潔、便利、安価、効果的であるべきと提唱され、少量の薬で大病を治療された。煎じ薬を大量に用いる中国大陸とは異なり、張歩桃教授は量の少ないエキス剤を主に用いるため、張歩桃教授の臨床は日本人がとても参考にしやすい。

台湾の人は穏やかで、優しく、明るい性格であるが、中医学においても色んな流派、色んな国の文化を受け入れ、良い部分をうまく吸収しているのが台湾の特徴だと、今回のフォーラムで感じることができた。

日本中医薬学会 理事、梼原町立梼原病院
吉冨　誠

今回、私は初めての参加ですが、会場の台大医院国際会議センターはこれまで国際東洋医学会の会場になったため数回訪れています。開会式では頼清徳副総統のビデオメッセージと新型コロナ対策で大活躍した陳建仁行政院長のご挨拶がありました。

今回のテーマは Evidence & Globalization of TCM。まず Evidence に関しては今回拝聴できた講演の中で中華民国中医婦科医学会栄誉理事長の徐慧茵先生の子宮内膜症の中医治療が印象的でした。現代医学的な検査の裏付けの元に中医薬を用い、良好な治療効果を上げていることがわかる発表でした。日本からは加島雅之先生が「西洋医学の急性期医療を補完する伝統医学」、新潟保険福祉大学の津田篤太郎先生が「対鍼灸認識不足的日本地区和年齢組対鍼灸的潜在需求」を発表なさいました。

Globalization に関しては今回日本から日本中医薬学会・横浜薬科大学、香港、マカオ、韓国、欧米各国からの参加があり国際色豊かな会でした。韓国からはソウル市韓医師協会や大韓女韓医会のご一行が多数参加されていました。台湾の皆さんや各国の代表との交流もできました。特に来年 8 月 30 日に同じ会場で開催される国際東洋医学会の台湾側中心メンバーとお会いできたことが収穫でした。「来年また会いましょう」とお約束しました。日本中医薬学会の皆様も奮ってご参加ください。

日本中医薬学会 理事、株式会社誠心堂薬局
西野 裕一

台湾政府の支援のもと、大学、病院、クリニック、製薬会社及び民間団体等が世界各国から集まり、疾病の治療から養生までさまざまな分野において中医学の基礎研究や応用についての学術発表がなされた。発表の一つの要約を以下に記す。

〇台湾の陳旺全教授の発表

生活習慣病（高血圧、高脂血症、糖尿病等）について、中医学のデータに裏付けられた診断と治療の話であった。

西洋医学の精準医学では DNA レベルでの検査や治療が行われているが、中医学では体質に応じたオーダーメイドで予防・治療するということが昔からなされている。

生活習慣病について中医学を生かして、予防から治療まで一人一人に合う方法があり、治療よりも予防にもっと注目するべきである。

2011 年にアメリカの国家科学院院士である Leroy Hood が P4 医療（P4 Medicine）を提唱した。まず予防（Preventive）。不調が出てきたら予測を立てて（Predictive）、個人に合わせた（Personalized）治療。さらに悪化したら参加型（Participatory）の治療をするというこれからの医療のあり方を示すモデルである。

2000 年前の『黄帝内経』に、上医は未病の段階の病を治し（Preventive 段階）、中医は病気になりかけている病を治し（Predictive 段階）、下医は既に病気の病を治す（Participatory 段階）と記載がある。最先端の医療モデル（P4 医療）が、東洋医学では弁証論治に基づいたオーダーメイド医療（Personalized）、予防医学として 2000 年前からすでに実践されているのである。

今回の大会は盛大に行われ、内容も充実しており、これから中医学の時代が来るのではないかと自身も責任を感じ、気が引き締まる思いである。

日本中医薬学会 評議員、広胖堂はりきゅう治療院　MATAHARI
東北大学大学院医学系研究科　漢方・統合医療学共同研究講座
神谷 哲治

2019 年以来 5 年ぶりの参加になる。ずっと交流を続けてきた台北中医師公会の先生方にも久しぶりにお会いできて感慨深いものがあった。

今回、日本の訪台団は我々中医薬学会だけでなく、常葉大学や横浜薬科大学薬学部漢方薬学科の方々も参加されていた。特に横浜薬科大学からは教員だけでなくその学生達も大勢で参加されており若い方々の参加はとても印象的であった。また毎回の事ではあるが、会の祝辞に副総統や総統府秘書長、行

政院長など政界からも大勢参加されており支持されていることがとても羨ましく感じた。参加国も年々増えており、日本以外にも韓国、アメリカ、カナダ、ブラジル、アルゼンチン、マレーシア、シンガポールなど多数の海外の中医薬団体が参加されていた。

発表において臨床的には主に漢方では経方に関するものが多く、鍼灸では鍼刀に関するものが多い印象であった。また印象的であったのは伝統医学に AI やビッグデータを用いた研究も多く今の世界の潮流なのだと感じた。伝統医学にも定量化や標準化といったものが必要であるが日本はいまだに一例報告ばかりで、この分野の研究では大きく後れを取っていると感じる。

このように世界中の先生方と交流を深めることで日本の漢方・中医の更なる発展に繋がれば幸いである。